

「神の国への道標」

(マルコによる福音書 1:21-28)

今日の福音、カファルナウムでの出来事に主イエスのご生涯、この世で主イエスがなされたことが凝縮されています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15)主イエスはこの宣言とともに活動を始めました。主イエスの到来とともに、神の国が訪れました。神の国とはどのようなところなのか、主イエスの行動によって明らかにされます。今日の福音で、主イエスは汚れた霊を追放しました。霊には良い霊も良くない霊もあります。汚れた霊とはわたしたちを神から離れさせようとする霊、力です。その力は、わたしたちを神の祝福から遠ざけます。汚れた霊からの解放とは神との関係の回復であり、神の国とはそういう力からわたしたちが解放された世界のことなのです。この日は安息日でした。安息日とは世界を創造した神が、被造物すべてを祝福し安息なされた日のことです。その日を週に一回守ることで、人間は神の祝福を回復する、そういう日です。その日にふさわしく、主イエスは汚れた霊を追放することで神から祝福された命を回復しました。主イエスとともに訪れる神の国とは、誰もが神によって祝福された命に満たされた世界なのです。主イエスによって汚れた霊から解放されたところに、神の国が広がっています。

時を隔てた今を生きるわたしたちはどうすれば、主イエスによって訪れる神の国に生きることができるようでしょうか。それこそ、「悔い改めて、福音を信じること」によってです。「信じる」というと、今日の福音のような奇跡を信じることができるのか、ということばかりに気を取られてしまうかもしれません。しかし、それではポイントがズレてしまいます。大切なのはこのことを通して主イエスは何を示されたかったのか、ということです。奇跡というのは「しるし」です。たとえば、「落石注意」とか「一方通行」などの道路標識。これは安全のためなどに象徴的な絵や記号を用いてわたしたちに必要な情報を知らせてくれる「しるし」です。標識から正しく情報を受け取っ

ているなら、標識はきちんと目的地へとわたしたちを導いてくれます。奇跡もそれと同じで、わたしたちを導いてくれるものとして見るのが大切なのです。ならば、今日の奇跡が何をわたしたちに示すものなのかといえば、神の国を知らせてくれる標識、道標です。今日の奇跡物語は、ここに主イエスとともに神の国が訪れている、ということをわたしたちは示すものです。神はイエス・キリストを通して汚れた霊からわたしたちを解放してくださる方であり、この方を信じるところにこそ、神の国、神と共に生きられる世界が訪れることを今日の奇跡は示しているのです。主イエスの奇跡とは、そういう標識なのです。奇跡が「本当か？」というのは二次的な問に過ぎません。大切なのは、その標識の意味することを信じて、その標識が示す方を信じて歩むことです。それが、福音を信じるということです。

福音を信じるというのは、主イエスが示される標識の先に、神の国があると信じることです。そして「悔い改める」とはどういうことかと言うと、違う標識を見ていた人が、主イエスという標識、主イエスによって示される標識を見て歩みを変えることです。霊に良い霊と良くない霊があるのと同じように、わたしたちの世界には標識が乱立しています。その中で、汚れた霊の示す標識ではなく、イエス・キリストという標識、しるしを見て歩いていく先にこそ、神の国が広がっています。そのことを信じて歩むことこそ、「悔い改めて、福音を信じる」ことです。今日、あらためて自分はイエス・キリストによって示された標識を見て歩んでいるだろうかと問いましょう。神の国は、主イエスとともに訪れています。神の国を示す主イエスの標識を見つめて歩いていきましょう。立派である必要はありません。今日、会堂で汚れた霊から解放された男は、主イエスに向かって叫んだから救われたのです。わたしたちも叫んでも何でも主イエスの前に立ち続けるなら、必ず主イエスはわたしたちのことをも汚れた霊から解放し、神の国へと迎えてくださいます。主イエスの標識を見つめて、信じて歩いていくことができますように。